平成　３０年　４月　２５日

豊明市議会議長　殿

豊明市議事課
30.4.25
分類　・　・　30・10・5・1
可・否・一部否・一時否
第319号受付

研修会・講演会等参加報告書

議員名　ふじえ 真理子

平成30年度豊明市議会政務活動費にて下記の研修に参加しましたので報告します。

日　付	研修先	研修項目及び成果等
４月２１日（土）	全国町村会館 (東京都千代田区)	地方議会議員フォーラム 2018 “議会改革の第二ステージ ～議会評価を考える～” ☆「次世代地方議会のあり方」 早稲田大学名誉教授　北川正恭氏 ☆「議会からの政策サイクルとその評価」 山梨学院大学 法学部教授 江藤俊昭氏 ☆ 事例紹介・パネル討議ほか

（注）別紙添付も可能とします。

（注）本報告書は５年間公開します。

地方議会議員フォーラム2018
「議会改革の第二ステージ～議会評価を考える～」に参加して

豊明市議会議員
ふじえ 真理子

◎参加した理由・目的

同フォーラムへの参加は昨年に引き続き２回目。一般質問や質疑などで行政側に対して求める「PDCAサイクル」について、議会側自らに同じ問いを投げかけると胸を張れない。「住民福祉の向上につながっているか」を起点に、「議会評価」（自己評価・外部評価）のあり方を政策サイクルの中で考えていかなければならない時代。先駆的と言われる議会が「最初の一歩」を踏み出せた経緯と苦労・工夫したこと、また「これから」の課題についても学ぶことで、今後の議会活動で活かしていきたいから。講師陣にも魅力を感じたから。

日時：平成30年4月21日（土）13:00～17:00
会場：全国町村会館　２階ホール
主催：公益財団法人　日本生産性本部　自治体マネジメントセンター
共催：早稲田大学マニフェスト研究所
当日の流れ：

【基調講演】「次世代地方議会のあり方」
早稲田大学名誉教授・早稲田大学マニフェスト研究所顧問　　北川　正恭氏

【問題提起】「議会からの政策サイクルとその評価」山梨学院大学法学部教授 江藤　俊昭氏

【事例紹介】議会における評価の実際
「議会からの政策形成サイクルとその評価のガイドライン」
会津若松市議会　議会運営委員会委員長　　松崎　新 氏
「議会の力が地域の未来を創る」　　可児市議会　議長　　川上　文浩氏
「“大津市議会ミッションロードマップ”による政策サイクルと評価モデル」
大津市議会局　次長　　清水　克士氏

【パネル討議】「議会改革の進化に向けて」
テーマ１「政策サイクルの展開と議会評価のはじめの一歩」
テーマ２「先進議会のこれから」
＜進行＞千葉茂明氏（月刊ガバナンス編集長）、＜以下パネリスト＞中村健氏（早稲田大学マニフェスト研究所事務局長）、福田利喜氏（陸前高田市議会議員 議会運営委員長）、目黒章三郎氏（会津若松市議会議長）、鈴木和美氏（船橋市議会議長）、廣瀬集一氏（甲府市議会議員）、川上文浩氏（可児市議会議長）、牧内功氏（元飯田市議会事務局次長補佐）、清水克士氏（大津市議会局次長）、前泊美紀氏（那覇市議会 議会改革推進会議座長補佐）

【本日の総括】「議会改革の第二ステージにおける課題と展望」

◎印象に残った主な内容

☆キーワード：「地方から日本を変える」「地方の改革は議会から」

北川先生の基調講演では、過去20年間の流れ（中央集権から地方分権へ）、地方創生の本質について解説された。議会の存在価値が問われていること。二元代表制。議会が執行部の追認機関ではなく、市民に向かって本当に開かれた議会をつくっていくためには、事務局の強化も必須である。

☆「議会のPDDDCAサイクルの重要性」

江藤先生による問題提起では、住民を住民自治の主体として把握することをまず基本とし、議会改革によって、住民自治をどれくらい進められたか、も評価基準になるという視点が大事。

国内では2006年栗山町議会基本条例制定を境に、地域経営全体を視野に住民と歩む本当の歴史に入っていった。

P（計画）→D（討議）→D（決定）→D（実行）→C（確認）→A（行動）

1）目標がないと成果は出せない

2）条例を詳細に確認検討…疲れる…何のための評価？…住民に開かれているか？

3）その政策が住民のためになっているか、を評価するシステムがあればアウトプット（成果）が見えてくる

4）“チーム議会”を事務局と一緒に創りだす

☆ 会津若松市議会　議会運営委員会委員長　松崎 新氏

・はじめの一歩は「会津若松市議会基本条例」平成20年6月22日制定から

・政策形成サイクルの主要３ツール

① 市民との意見交換会…意見聴取（政策形成サイクルの起点）

② 広報広聴委員会　…意見整理→問題発見→課題設定

③ 政策討論会　…問題分析→政策立案（つくるのではなく練り上げる）

・政策討論会報告書で議員任期４年の取り組みの方向性を出す

・前期議会からの申し送り事項

・２年間（中間総括）と４年間（最終報告書）で政策研究のまとめ

・４年任期でブツ切りとせず、議会として改選後の代表者会議へと引き継ぐ

・予算審査 決算審査準備会を導入…個人でなく議会として準備

（事務事業の評価・総合計画・個別計画）

・常任委員会（４委員会）と予算決算委員会（４つの分科会）と政策討論会（４つ分科会）はそれぞれ同じメンバーで構成（専門性活かす）

・執行機関との善政競争。議会の議決責任、財政を正面から受け止め毎年研修と評価を実施

・総合計画と個別計画を意識する。個別計画と年度予算の論点を抽出し、決算審査から翌年

度の予算審査へと継続した評価を意識して実施している。

・今後は政策討論会を常任委員会でやれるよう通年議会を導入し、議会活動を整理する。

・見て知って参加するための手引書として「会津若松市議会白書」（25 ページ）を作成　写真→

・客観的評価と自己評価

① 議会制度検討委員会

1　議会活動・議員活動と報酬

2　議員定数

3　公募市民委員２名参加

② 広報議会モニター制度導入

広報議会モニターで意見感想をもらう

年２回アンケート

60 名（一般公募５名・各種市民団体の推薦）

任期は２年

同白書の「もくじ」↓

☆可児市議会　議長　川上文浩氏

・二元代表制は、車の両輪ではダメ

・地方自治は民主主義の学校

・丁寧な議会審議…熟議型議会（自由討議しないと説明ができないから）

・議会運営サイクル　前期からの提言を受け、議長マニフェストや議会課題の引継ぎ。

＜決算・予算審査の主な流れ＞

・決算審査：重点事業点検報告書を活用しての決算説明を受けた上で決算質疑→分科会にて提言案を検討→議会報告会・地域課題懇談会等の意見を反映して提言まとめ→全会一致したものだけを本会議場で市長へ通知。

・予算審査：重点事業説明シートを活用した予算説明を受ける→決算審査で出した提言が反映されているかの結果報告を受けつつ、予算質疑。

・一般質問の中から、「これは！」の部分は委員会所管事務調査へ追加する。

・ママさん議会…建設中の駅前子育て拠点施設への提言・要望（例：銀行 ATM 設置や夕方から施設内での飲酒可）が実現した例

・議長職における引継ぎ事項　例）議会 BCP の策定と BCP に基づいた議会防災訓練

・委員会代表質問

・外部評価の取り組み…交流のある名城大学の教授ゼミ生や NPO も参画。

☆大津市議会局　次長　清水克士氏

・大津市議会の政策サイクルのポイント

「大津市議会ミッションロードマップ」（議会版実行計画）

特徴：任期以上の長期計画、具体的内容と実行時期を任期当初に明示、評価スキーム

・３つの大学とパートナーシップ協定を締結

・毎年度ロードマップの検証と評価結果を公表

・討論型世論調査（※）の検討など　※１回限りの表面的な意見を調べる通常の世論調査でなく、討論のための資料や専門家から十分な情報提供を受けて、小グループと全体会議でじっくり討論した後、再度、調査を行なって意見や態度の変化を見る手法（慶応義塾大学 SFC 研究所）。

・議会活動評価制度

＜方法＞

一次評価（議員個人による）

二次評価（一次評価を踏まえた各会派内での協議による取りまとめ）

三次評価（議会運営委員会での調整）

＜評価項目＞

１ 議会の機能強化　　２ 政策立案　　３ 情報公開（広報）　４ 市民参加（広聴）

＜外部からの検証＞

◎感想と課題

時代とともに議会に求められる役割が変わってきている。私が感じた、先駆的な議会の共通点は次の通り。

1　“市民”を起点にして物事を考えている。時代の先を読み、市民とともに専門家の力も借りながら、市民福祉の向上のため、「前例」ではなく「前進」し続けている。

2　人を動かす“熱意”が聴く側に伝わってくる（熱意が市民をも動かす）。

3　議会として決定するプロセスを大事にしている（委員会代表質問など、道具をたくさんもつことで議会の力を発揮できるという考え方）。

4　連続性の視点。任期４年または任期を越える長期スパンで議会本来のあるべき姿を創りだそうと努力している（積み上げてきたものを来期へ申し送る）。

5　他議会がやっているから…ではなく、自分のまちにあったやり方で「めざす議会の姿」に向け、“チーム議会”で取り組んでいる。

6　失敗を恐れず、あきらめず、３歩進んで２歩下がるペースであっても着実に前進。

7　過去からの時代の大きな流れと、自分たちの立ち位置を理解した上で、「地方から日本を変えていく」「地方議会から地域を変えていくんだ」という気概をもっている。

前期議会の様子を知っている身からすると、豊明市議会は今、過渡期真っ只中にいると思っている。フォーラムに参加してみて、発表者の体験（実践）から出てくる、心に留めておきたい言葉がいくつかあった。

『花はとれなくても実はとる』『まちづくり運動２・６・２の法則』『委員会を充実させること＝ディベートでなく対話をつくっていく』『議会改革に関して賛同を得られない議員に対して、彼らを動かせられない自分が悪いのか、動かない議員が悪いのか（←先駆的議会の方たちは前者の考えでアプローチしている）』『議員一人だと線香花火、議会がまとまってやれば打ち上げ花火になる』。

任期残り１年を切っているが、連続性という意味では「本当に」開かれた議会にしていくため、私には相手にきちんと伝わるだけの“熱意”がもっともっと必要だと痛感。こうありたいという議会像（議長のあり方も含め）も具体的に見えてきた。

議会からの政策サイクルの必要性を理解して仕組みを練り上げ、そのサイクルをまわしていくには当然、事務局の力が大きな鍵となってくる。“チーム豊明市議会”をつくっていくという視点から言えば、例えばこうした今回のフォーラムに事務局職員と一緒に参加することも同じ土俵で話し合うことができ、知恵を出し合い、向かっていくベクトルを太くしていけるのではと思った。

終わりなき議会改革。いつの日か、先駆的な議会として豊明市議会が加わり、北川先生のおっしゃる「地方議会から地域を変え、日本を変える」その一役を担える市民本位の政治を豊明で実現させたい。